

「長男の分を多くするのは当然だ」

28.5% 12.7%

「長男は家をつぎ親を養う義務があるから親の財産は長男に大部分ゆずるべきだ」21.0% 15.6%

「男の子だけ平等に分るべきだ」

1.7% 3.7%

一見して明らかなように、ここでは親の財産は「男女平等に分けるべきだ」という項目と「長男の分を多くするのは当然だ」という項目に関して、父兄と生徒との間に大きな違いのあることがみとめられる。

即ち「平等に分るべきだ」という意見を、父兄が48.2%しか支持していないのに生徒は67.4%支持しており「長男の分を多くするのは当然だ」という意見に対しては、父兄が28.5%支持しているのに、それよりも約16%低く12.7%しか支持していない。

生徒の考え方が、父兄のそれとこのように違っている理由として、一つは生徒の考え方の未熟さと、他の一つは、未熟ではあるが父兄よりもより高い民主的な意識が形成されているということにあるように思われる。

即ち、生徒は未だ未熟であって、家の財産の分配というようなことについては身に迫った問題として感じておらずただ観念として理想的な意見をもっているにすぎないと思われることが多い。これが父兄との差を多きくしていると思われる。併し又生徒がこれからの社会態勢等を考えた上で、民主的な社会を作るためには、矢張り家の財産の分配も原則として当然平等に分配することが正しいと考えている結果であることも明らかである。財産分配の問題と切り離すことのできない親を養う義務の如きについても、これからは、長男だけがもてばよいという性質のものではなく、兄弟姉妹が皆同じように分け合うべきだという生徒の考え方がこのような意見をより多く支持させているのであろうと思われる。以下このようにして各項目毎に分析検討を加えると共に更にこれを職業年令別に考察し考え方の傾向をより明確ならしめた。併し今次の報告に当っては紙数の関係から省略する。

〔Ⅱ〕中小商工業者の意識形成過程

(1) 調査の目的

輿論調査 その1(質問紙)その2(面接)等の第一次の調査によって、地域における生活の課題を一応明らかにしたわけであるけれども、我々は更に、このような幾つかの課題の中で特に問題とされなければならない課題が、どのようなすじみちをへて生れてきているかを明らかにしようとしてこの調査を取りあげ実施した。

(2) 調査の方法

第一次の調査にもとずいてまとめたところの問題的な意識や問題的な行動の様式について、更に一応の文献研究を行い。それらがどのような社会的・心理的なるごきの下に生れてきているかの概要をとらえ次に更に面接によって具体的な確かめを行いそれらが生ずるに至った経過を明らかにしようとした。

○調査に際しては対象者に対しあらかじめ極く親しい人を通じて連絡をとっておき気楽に話して貰えるように特に留意した。

○訪問に際しては以上のような方法をとったわけであるが、話し合いはできる限り雑談のような形をとり入れ自然な形で話をすすめるよう意を用いた。

○面接の際用いた調査項目は、さきに行った調査のまとめを用意した。そしてそれ等につ

いてそのような事実をどう思うか、何故そう思うか、いつごろからそう思うようになったか、どんなときそれを強く感ずるか、どうしなければならぬと思うか等たずねた。
○答はそのままでできる限り忠実に記録すると共に、そのときの様子更には感じられた事から等を記載した。

(3) 調査期日

昭和27年4月10日～昭和28年10月31日

(4) 結果の整理

結果の整理は調査員の面接の結果並びにそれに対する考察をそのままとりあげその調査事実を所員並びに市指導主事の討議によって 調査員の主観的なかたよりをできる限りとりのぞいてそこにある地域の問題的な意識や行動の様式としての貧困感・利己的な意識・権威主義の三つの課題に集約して考察し、最後にこれについての総合的な考察を試みた。ただ今回は紙数の関係から個々の面接の結果並びにそれに対する考察はのせることができなかつた。

以下、三つの問題的な意識としての①貧困感と、それに伴って生じてきた「何よりも金」という経済先走り型。②利己的な意識や態度 ③事大主義・権威主義取りあげ、先ずその概要について述べ、次にこれらの問題並びにそれらに直接結びついている意識や態度について 稍くわしい考察を加え、最後にこれらの意識や行動の様式の生ずるすじみちを、総合的に考察するという順序で整理してみよう。この調査をすすめる途中で、静岡や新潟等の研究所の研究から多くの示唆を与えられた。

(A) 三つの中心的な課題とその概観

(a) 貧困感と「何よりも金」という経済先走り型

この地域の人々は何よりもまず金、という気持が特に強く、何事も金で解決することができると考え、又人を評価する際にも金の力をもっているかどうかを第一に考えるというような傾向が極めて強い。このような経済先走り型は、必ずしもこの地域のみにもみとめられるものではないけれども、この地域においては特に強く感ぜられる。そしてこのような考え方は、従来の義理や因襲を乗り越えるためには極めて合理的な行動をとらせるという意味から、極めて有意義なものとなっているけれども、併し又これが精神的な価値までも金で評価し、又金をもうけるためには他人の迷惑も、地域の発展も一切かえりみないというような考え方を生むに至って、地域の眞の発展を大いにはばむものとなつてきている。

このような意識は特に中小商工業者に強いといわれているけれども、決してそれだけではなく市民全体の意識となつてきている。

(b) 利己主義

足利の市民の欠点としていつも最初にあげられるのは 人々の「利己主義」である。足利の機業家の最も大きな欠陥が「足利の機屋は利己的であつて、全体の立場から自分を考えるというようなことがなく、従つて他の人と協力して計画的な生産を行うことができない。」というところにある。足利が発展しないのはこれがためだという意

見は極めて多い。

このような利己主義は、徳川末期以降漸次強められつつあった独占資本のしわよせを受けて、一人一人は精一杯の努力を払い、又力の限りもがきながらも目立った発展をとげることのできなかつた日本全体の中小商工業者が、何回となく襲いくる不況をどうにかして切り抜けようとしてとった生活の構えが表面にあらわれたものにほかならなかつた。このような利己主義はさきの経済先走り型がそうであつたように、一面においては従来から根強くあつた権威主義を否定するところの、「だれにも頼らないひとり立ちの独立した意識」として、発展的な意味をもっていると共に、又大勢としては「自分や自分のうちだけがよければ他人にはいくら迷惑がかかってもかまわない」という強い利己心となつて、何よりも大切な協同化をはかる上に大きな障害となつてきている。そしてこれがために幾多の問題が解決されないまま残され、人々の悩みをより深いものにしてしているのである。

このような利己主義は更にゆがんだ形として、「他人の成功をねたみ他人をおとし入れる」「他人の没落を自分の成功のように感じてよろこぶ」というようなよりみにくい意識として現われてきている。

勿論足利市民のすべてがそうであるわけではないことは言うまでもないことであるけれどもこのような傾向は目立っている。

(c) 事大主義・権威主義

地域の人々の問題的な課題のうち、さきの二つの事実について問題にされなければならないものに、この事大主義権威主義がある。勿論このような事大主義・権威主義も又それが日本全体の貧困性と封建性という最も大きな問題から派生してきているという点においては他の地区のそれと同じであるが、ただ併し発生のみなもとは同じであっても、地域の特異性の影響を受けてほかの地区とかなり異つた姿を示していると考えられるのである。

即ち 一つには、他の地区と同様「長いものにはまかれる」・「よらば大樹の蔭に」・「でるくぎは打たれる」等のような、権威主義の意識として、人々の心の中に形成されているが、また一方においては、さきにもあげたように、誰も彼も利己心が極度に強く、究極的には他人をたより、他人の世話になることなどはできない地域であるために、人々は他にたよることを諦め「他人は誰だつてあてにならないのだ。最後に頼りになるのは結局自分以外にありはしないのだ」という「ひとり立ちの構え」として徐々にではあるが強められやがて事大主義や権威主義をつききずして行くであろう「だれにもたよらないひとり立ちの構え」を自分達のものとしてきている。

しかも この両者は常に人々の内からみ合つて人々の行動を規制してきているのである。このような地域の人々の事大主義権威主義は、戦後もときには前者が弱められ後者が強められるかと思えば ときには又前者が強められるというような経過を経て現在に至っている。特に「ひとり立ちの構え」を強めたのは、敗戦による戦前の権威の衰えと権威者の失脚であり、又戦後一時おとずれた好況の結果とであり、前者

が強められたのは、「ゆがめられた統制経済」であり、無茶苦茶だといわれた税金攻勢とこれをのがれるために、どうしてもとらなければならない法の権威をおかしても生きなければならない生活を通してであった。

このように、強められてくる権威主義は究極的には否定されなければならないにしても、現在のところ極めて多くの否定し切れない意味をその背後にひそませているのである。人々が生き抜いて来るためには、どうしてもそうするより他に生きようがなかったのである。又戦後権威主義を強めたものに「統制経済」があり、「税金攻勢を逃れるための生き方」があり、これが人々をして「よらば大樹の蔭に」「長いものにはまかれろ」「でるくぎは打たれる」というような考え方を再びより強めるに至らしたためである。

このように一方においては否定される方向をもちながら、一方においては再びつよめられているというような意識は、ここにどうしてもこれを取りあげなければならないと考えた。

(B) 地域の問題的な意識並びにそれに伴って生きてきている問題的な行動の様式

(a) 経済先走り型とそれに附随した意識

(イ) 貧困感と何よりも金という経済先走り型

貧困にさらされて、人々は「何よりも金」というような経済先走りの型を示しているけれども、具体的にそれはどのような姿で示されているのであろうか。又この貧困を主な要因としながら、これに他のいろいろな要因が重なって、どのような考え方が生れてきているか、以下考察を加えてみる。人々の意見として、常に次のようなことが述べられている。

「足利人の特徴は、いい意味からも悪い意味からも、何よりも金という考え方が非常に強く、金になることなら一生懸命努力するけれども、金にならないことには身を入れない。又金ですべてのことを解決しようとし、又解決できるという考え方が極めて強く、金もうけのためには手段を選ばない」

「この土地の中心的な産業である機業が価格の変動のはげしい糸を取扱う仕事であるため資本の弱さが特に強く意識されてきており、何とかもう少し資本を蓄えなければならないという考えが強く、人々を金々という考え方にかりたてている。」

「価格の変動の波に対しても、もう少し資本の力が備っておれば防ぎきることができて、そんな大きな損失を受けないですむばかりでなく、これを上手にのりきつていけるのに地域の人々の資本の力が弱く、品物がもちこたえられないで投売りをするため常に損失を被りつづけなければならないのが小さな機屋の現状である。」

「戦前には足利でも4・5万の自己資本を持っていた機屋や買継はざらにあって、それ程めづらしくなかったけれども、最近ではこの戦前の4・5万に相当する2・3千万円の資本を持っている工場や買継は？と言ったら、本当に数える程しかなくなってしまう

た。そして又戦前は糸屋の資本が大きかったため糸も自由に借りられたのに 戦後はそれがなくなり金のないことが一層強く感じられるようになったのである。」
地域の機業家はこのような弱い資本で、景気の変動を上手にとらえることができず、いつも大きな資本のあふりを受けて機業家が三代とは続かず、古い人達はほろび新たな人がおこるということをくり返しながら機業地としての命脈を保ちつづけて戦前までたどりついたのであった。戦争によって、殆んど機業家はその織機をクズ鉄として献納して機業を廃してしまうか、或は軍需工場の下請工場として転換してしまった。敗戦によってこれらのすべてが無駄になり、その後のインフレによって従来蓄積された資本は殆んど無いに等しいものになってしまって、人々は又新たな出発を戦後開始したわけである。戦後一時おとずれた機業家の好景気がチヤ万時代の到来によって機業家も買継も糸商も これらの機屋の下請工場も かなりの回復を示したのは事実であった。併しこれも戦前の資本をとりもどすというところまでは到底いたらなかった。しかもその後の長い不況は ただ見かけたけが膨れた機業家に対してきわめて大変痛手を与えた。これらの多くの工場は次々に閉鎖されるか、賃織に転落していった。税金の攻勢は又厳しく弱りかけた機業家や買継の命とりになった。人々はこので「何とか金が欲しい」「金さえあればどうにかなるのだが」という気持を一層痛切に感じ 金の力を極めて誇大に評価するようになってきている。

「機屋の頭の中は金工面のことで一杯ですよ」

「機屋にかぎらず、この土地では機屋が悪ければすべてがそうなので、商人も又朝起きて夜ねるまで金工面でかけずりまわっているような始末です。頭の中はこの不景気がいつまでもつづくのか、問屋の払いをどうしたらよいのか苦勞のしつづけです」「朝晩のあいさつも、お茶のみ話も、同業者の集りのときにも、話しに出るのは不景気のこと相場がよくないこと、売れが悪いこと等である。誰の頭の中も このことで一杯でしょうね」

「金持が極端に尊敬されたりするのもしかたがないです。金があれば何だって解決するのだから…」

「金をもっている人達の中には確かに金をもっているというだけでなく立派な人達も沢山います。併し、少しも尊敬されなくともいいような人がただ金があるからというだけで人の上に立つというようなことがあるといやになる。」

「足利の人達の悪いこととして、金さえもっていればその人を一格高くみるというところがあるけれども、悪いことだ。金はなくても立派な人を先に立てるようにしないとだめだ。」

こうして人々の貧困感はいよいよつよめられてきている。一部においてこのような貧乏感や金万能主義に対する強い反省の声が叫ばれながら、併し大勢としてはこのように生きて生活を営んでいく必要から生れてきている経済先走り型の傾向は極めて強いものがある。

(ロ) 研究意欲に乏しく、又計画性に欠け知性を欠いた非科学的・非合理的な態度

「貧すれば鈍する」というように、貧しさ資本の弱さというようなことが、人々の研究意欲を失わせ人々をして計画性に欠いた非科学的な生活を営むようにさせていると

ころの最大要因である。併し乍らこの地域の次のような事情は一層そうさせていると
考えてよいであろう。即ち地域の中心的な産業が変動のはげしい糸を取り扱っている
という関係から資本の弱さともからんで、少し位研究しても殆んどうまくいかない。
それよりは感でうまく景気の変動をみきわめ機敏にやった方がうまくいくことがあ
る。それがため人々の間に計画を立て科学化や合理化をはかろうとする意欲がもりあ
がってこない。又人々はあまりその価値をみとめていない。この間の事情を示す人々
の話しとして次のようなことがぶつさき話のときにはどこでもきかれる。

「今迄この土地で資産を築いた人を考えてみても、その多くが、計画的な生産を図り
新しい織物を研究して作り出したというような人よりも、景気の変動や流行やらを
素早くみきわめてもうけた人達である。勿論その人としては研究もしたんでしよ
うけれども—」

このように最後の方に つけ足しのように研究もしたろうし計画も立てたろうとい
うようなことを言いたすけれども、矢張りもつている気持としては計画的よりは機敏性
がより大切だと考えているように思われる。

「流行のはやりすたりが早いから少し位研究しても追いつかない。追いつくためには
もつと規模を大きくして専門に研究しなければとてもだめだ」

「新しいものを研究すればいいことはわかっている、殆んど企業家が資本が小さ
く、主人が自分で機械もなおせば織もやる、原料の糸の購入もやれば、それをそめ
にも出し、できた製品の販売もやるというようなことでは、研究の時間など到底生
み出せない。そこで計画など立てなくても、これはよく売れているというものを素
早く自分も取り入れて、素早くきりあげて逃げてしまうことが、この土地では何
よりも有利な経営のやり方だ」このような考え方も更に成立させるものとして、地
域の機業生産の過半数 7.8割までは賃織に依存しているということがあげられる。
即ち次のようなことを言う人達は極めて多い。「足利で一番堅実な経営方法は、自
分のうちには機械も織工もおかないで、まわりの農村や機屋に賃織に出すことだ。
そして景気のいいときにはぐつと拡張し景気が悪くなったら手を引くことだ。素
早くこれをやれば、これが一番有利な計画的合理的な経営だ」

こうした方法の欠陥も少なくはないけれども、このような方法の勝れた点も確かに多
く、明治初年から終戦後の現在まで依然としてこのようなしくみでかなりの生産が
行われているのである。これが人々の計画性をにぶらせている点は否定できない。

更に計画的や合理的な方法を否定する意見として次のような意見が多くきかれた。

「いつもうまくいくとは限らないけれども、その時勝負で、それがうまく当れば何
とかやっつけていける。いくら考えてみても、どうせうまくいかないのだから、それ
より感にしかたがない」

「計画したって、どうせ計画通りにはいかないのだから、どうせ無意味だ。や
らないよりはましかも知れないけれども—」というような考え方が強くと人々の気持を
うごかしていると思われる。併しすべての人々が今後もこのままでいいという
ように考えているわけではなく、多かれ少なかれ、殆んどの人達が何とかしな
ければならないというようには感じてきているのである。

「織物の転換に当って、本当に無計画なところがある。毎年、生産期になつてお
こることであるけれども、どここのものが少し売れているとなると誰も彼も一度
にワッとびついてつくるため、その品の値がぐずれ、いつも損ばかりしているという

なことが多い。何回同じことを繰返しても こりずに失敗している」

このような無計画性に対して皆大きな反省をはじめている。そして漸次この問題を解決するため努力しようとはじめたきざしがある。

その一つは足利としてはかなり大きな資本をもっているしっかりした工場の研究的・計画的な経営の影響を受けて、又他の一つのうごきは、研究を可能にし計画的な経営をつづけるためには どうしても、同業組合をもつと強固なものとしなければならない協同化への要望と一緒になった意識として このような計画性のなさを克服しようとする意識が見えはじめてきている。

(ハ) 投機的であって堅実な経営を図ろうとしない。

人々の投機的な考え方や行動のしかたについては、極めて多数の人達が、地域の堅実な発展をばはむものとして強く指摘している。併しこうした意識も他のそれと同じように、生れるべくして生れてきた幾つかの背景をもっているのである。

少し極端な意見になるけれども、投機的な経営を批判したことばとして次のようなことがよくいわれる。「足利の機業家は事業家でなくて、糸商みたいなものです。機業家なら生産することによって利益を得るべきであるのに、糸の値段のあがり下りでもうけているのだから機業家でなくてむしろ糸商です。或は投機屋なのかも知れない」このような考え方をもち、このような経営を行っていかなければならないのにも、そこにはそうするよりほかにない幾つかの理由がある。

第1はさきにもあげた地域の主産業が 投機的な性格を多分にもち価格の変動の極めて大きい糸を取扱うという関係からである。人々の話しとして、

「いくら堅実にやっておつても、糸相場の動き方一つで すぐに首が廻らなくなってしまいます。堅実な経営ということも必要であるが、足利のようなところではもつと相場を見抜く力がないと機屋はなりたつていかない。これが人々を投機的にしている最も大きな原因である」という話をどこへいってもきく。しかも戦後のインフレ時代の意外な好況、堅実な経営よりも投機的な経営の成功がこのような人々の投機心に大きなはくしやをかけた。インフレが終つてからも このような夢をすてきることができないでいる。又インフレの傾向が止んで、その後押しよせてきた未曾有の不況に出合い見かけだけ膨れあがった多くの工場は思い切つた縮小を余儀なくさせられ、人々は自己の資本の小ささを身にしみて感じさせられた。そしてできれば何とかして、一挙にもとの繁栄をとりもどそうとあせり投機的な経営をとらせるに至っている。

多くの機業家が、「資本の弱さをあまりにも強く意識させられ、つい一気にもうけようとして却つて失敗している」併し、その中で僅かな人だけが成功すると、その人だけが強く浮びあがり、人々を投機的な方向にかりたてるのである。

又この地域には、このような投機的な経営を可能にする要因がもう一つある。

さきにも述べたところではあるが、それは足利地方に異常なまで発達している賃織がここに行われているということである。この間の事情について人々は次のように語っている。

「周辺の農村には腕のすぐれた素晴らしい女工さんたちが無限と言つていい程にいる。この人達はさあというときには いくらでも仕事を引き受けるし、又逆に仕事がなくなれば、勿論-銭の給料も払わないですむ。これは不景気のときは給料を払わないですむ女工さんや工具を備つておくのと変りがない。そこで糸を買い入れる資本さ

えあれば いくらでも大きくやることができる。これが人々をして無計画な投機的経営に走らせる大きな理由になっている。

「この土地で最も堅実な経営とは言えば、賃織に出すことです。景気がよくなればいくらでも手広くやることができるし、不景気になれば一銭も金を払わないですむ。又工場はないが又は極めて小さくやっているのであるから、税金もかなりののがれられるし、設備のための資本も極めて少なくてすむ。この土地ではどんな経営よりも、こういう経営が一番堅実な経営だということができる」

「賃織に出してうまく当れば、一挙に何拾万・何百万と利益を得ることができる。」これらのことが人々を投機的にしている。

人々は投機的な経営に失敗しても投機的なやり方をあきらめようとしな。失敗してその痛手あまりにも大きく、堅実な経営をつづけられる見通しも消え失せて、半ば自棄的にその苦しさを一挙に解決しようとして投機的になっている。このような苦しさを何とか切り抜けるための一つの道として極めて多くの人達がこれを選んでる。

「金融機関も、大きいところに対しては比較的容易に融資してくれるけれども、本当に困っている小さな企業者にはなかなか融資してくれない。そこで困った人達は無理な金工面をしても何とか一もうけしようとして投機的になる。戦後競馬・競輪・パチンコ等のあそびが異常なまでに盛んになったのは、何もこの足利だけに限ったものではないけれども。併し、この足利の状態を他の地区のそれと比べると矢張り、以上のような地域の商工業を含んだ地域の人々全体の投機的な意識と深い関係があるように思われる。

(b) 利己主義並びにそれに結びついた意識

(イ) 利己主義

地域の人々の行動は「協同性に欠け、自分だけ自分のうちだけがよければまずいいのだ」という考え方によって強く規制されている。而して、このような利己主義は更にゆがめられて、「他人の成功をねたみ、誰かよくなるとそれを引きずりおろそうしたり、又他人の不幸をみてよろこんだりする」というような行動となってあらわれ、人々の生活の上に暗い不健康な影を投げかけている。人々はこのような利己主義に妨げられて同じような立場におかれ同じような悩みをもつ中小企業者同志、更には苦しい生活に悩む人達同志が「誰もみな同じような苦しみや悩みに堪えて生き抜いているのだ」ということを心深く感じとり、孤立したままの自分の心を、多くの人達の心の中に とけこませることによって「心をつにし、手をたずさえて同じ自分達の問題を解決していこうという、協力の態勢への動きを起すことができないで互に悩んでいるのである。

人々のこのような利己的な意識は、さきにも述べたように、一つには、食べて生きていくための人々の生活の必要からそれが生れてきていると共に、一つには又、生活の必要から生れてきた このような意識が今後は逆に人々の生活のしくみをより一層利己的なものにし、このような利己的なしくみが再び、人々の考え方をより一層利己的なものにしてきているのである。このような過程そのものは人々のあらゆる意識形成のすじみちに連なるものであると共に、最も明瞭な型としてこの場合現れてきている。地域において、人々は最初小さい資本ながらもかなりのゆとりをもって、明治初期の手工業から工場制工業への切替を行ってきた。而してその後おとずれた何回かの

蔵しい不況—それが何故起つてきたかについては略するが—に或る者はつづれあるものは残った。しかもここでは現在までのところ利己的であることが何等目に見えるような形で個人の衰因と考えられるような事情が明らかにされてこなかった。何とか残り又その間において栄えた人たちの隆盛の原因の殆んどが、景気の変動を機敏にみてとつたかどうか、他人にさきがけて抜がけ的(てき)に利益を収めたかどうかという点にかかつていた。利己的であることはこの際極めて大切な要件であつた。取扱う品が景気不景気の変りかたが極めてはげしく、織物であつたということは、他人との話し合いなどでなく、めいめいできる限り機敏に景気の流れをみてとつて、原料としての糸を買い入れ如何に早く仕事をし、次には時期をみて如何に早く切りあげるか、売り逃げるかということも又極めて大切な要件となつていたのである。流行の移り変わりのはげしさと需要に限界があるということの二つが、人々の抜がけ的利己的な傾向に一層はくしやをかけた。こうした傾向は内地織物において特にいちじるしかつた。

小さな同業者が極めて多いということは一面協同化への可能性を内にはらみながらも、前述のように生じた利己主義が更に相互の競争と利己的な行動を助長している。人々はこのような利己的な行動、機敏な行動をもつてしても次々に押しよせる不況の性格をうすうすと感じ、利己的な行動の限界に気付き何回か協同化によってこれに乗(り)切ろうとして協同化を試みた。ときには操業の短縮を申し合わせたり、或は同業組合をつくつたり検査制度を強化したりして利己主義的な競争を抑え競争からくる不利をさけ又粗悪品によって製品の名声のおちるのをさけようとした。然るに、これが又あまりにもきつい貧困感と取り扱う品の性格からくる個人的な行動のもたらす目前の利益にそそのかされて、悪いと承知しつつ利己的な行動に走らざるを得ないようなことになつていたのであつた。

更に極端に困つてくれば次のような気持にもなる。「極く僅かな損得でも人々は金となると極端に強く意識して問題にするので原糸の共同購入や製品の共同販売というような協同化ははかれない。」このように協同化はいよいよ困難になりすべての問題の解決が個人の問題にのしかかってくる。そしてやがて何回かこういうことが繰返され解決されずにすぎているうちに、人々の間に「表面では皆のいろいろなことを言つても、蔭にまわれればそうはいかないものだ。誰だつて自分が一番可愛いのだし、自分のうちが大事なのだ。いざ困つてみれば誰も助けてなどくれはしない。だから誰も困らないように少し位他人に迷惑をかけても、何とかもうけておかなければならないのだ」「不景気になれば、他人のことなど誰だつてかまってくれるものではない、皆のためだと言つて先に立っている人達だつて結局のところは自分のところに得になるか損になるかということだけで動いているのだ」というような考え方を形成するに至つていたのである。さきにも述べたところではあるけれどもこのような考え方に対して「足利の織物の生命は柄と糸使用の特異性ということに一番大きく依存しているのだ。だから協同だの協力だのと言うけれどもそうとばかりもいかないことがある」というようなところが孤立主義への口実をあたえているのである。

(ロ) こうかつて営業道徳を重んじない。

前述のようにして中小商工業者の困窮がいよいよはげしくなり、しかもその解決が、個人々々の問題だけにおきかえられてしまうというような事態が生じてくると、最初正しい行いによって生き抜こうとしてきた人達も、正直者がいつも馬鹿をみて、人の

あとあとに廻らなければならないというようなことに何回も出会っているうちに、結局自分だけいくら正しくやっけていこうとしても、皆がその気にならないのだからしかたがないようになって、他人との協約や営業道徳を無視したりするようになる。足利の機業家の中にこのような営業道徳を重んじないために、足利の品物の中には極端な粗悪品が少なく、足利の人自体が強い批判を投げかけている。人々の話しとして次のような話はよく聞かされる。

「足利の品は安かろう悪かろうということで名が売れているが、全くひどい品を作っごまかして売ることが少なく、そういう人達があとをたたない。不況になってこういうことのために強く反省しなければならないような苦境に立たされて、少しは気付くのであるが、少し景気がよくなると又一もうけしようとして、すぐにごまかしをしようとする悪いくせがある。こんなわけであるから、この土地の人が自分の土地で作られた品物を買わないで、同じ品物でも他の産地のものを買おうとするような傾向が強いのも、土地の品物の中にごまかした製品のあることを知っているからである」勿論全部がそうだというわけではなく、なかには終始堅実な品物を生産し信用を獲得している機業家もあることはあるが、こういう人が少ないのである。」と、又足利の機業については次のようなことがよく言われている。

「足利では機屋は二代とつづかない」といわれているけれども、こうして考えてみると本当に二代つづいて盛んにやっているという家は僅かしかなく、今盛んにやっているといううちの大部分が、いまの代になつてはじめた人が多い。この原因はすべて営業道徳がないためだけでなく、戦争のための機業の整理や織物そのものが変動がはげしいためというようなこともあるが、併し最も大きな理由は長い目でみて堅実にやっけていこうという人が少なく、粗悪品を出してでも一時のボロもうけをねらおうというような人達が少ないためである。」

又営業道徳が守られない理由の一つに、「この土地の人達が「金」の価値を必要以上に大きく考える。そこで道徳的には大いに非難されるようなことで金もうけをしても少し時期を経過してしまえば金をもっているということだけで人の先に立つような身分になれるから、一時の非難などかまわないですることをやってしまうということが少ない。粗悪品をつくったり、協約を無視したりするのはまだよい方であつて、悪いのは、計画的に倒産をしてしまつて他の業者に自分の損失を背負わせ、3ヶ月も経てば平気で又仕事をはじめるといふようなことさえ行われる。」

又「いくら良心的にやっけておつても結局は時代の波に流されて倒れていかなければならないということから、どうにもならないで半ば自棄的にずるく立廻る人達の少ないということが、多くの人達の良心的な考え方をまひさせてしまうのである」といわれるように一部の人達のまずい行爲が他の人達にまで広がっていくという点もある。面接の際によく言われた言葉であるけれども次のようなことばは、多少違った意味も含まれているが、この間の事情を物語っているように思われる。

「悪貨は良貨をくちくすということわざもあるように、誰か一人、組合や仲間の間の取きめを守らないで、うまいことをする者があるために皆だめになってしまうのだ。」

このように、営業道徳を重んじない人々の態度も、そのよつてくるところは、他の問題的な意識と同様に「そうするより他にどうにも止むを得ない」といふような幾つかの原因から生じてきているのであつた。而して現在、人々は又そうするより他にどう

にもならないでそうだったのではあったが、そうして生れたまづい行爲のはねかいらいとして一層きびしい不況にみまわれ、何とかしなければならぬと深く反省している。そして又検査制度を強化したり、組合の団結を強めたりするための幾つかの試を眞剣になって考えてきている。

(ハ) 機敏な態度

問題にされなければならない多くの意識や行動の様式をもち、これをどのようにして改善していったらよいか常に悩んでいるこの地域において、人々が機敏であつて、少しでもよいとなればそれをただちに取り入れていこうとする進歩的な態度は、この地域の人々の長所としての行動様式として大きく取りあげられて然るべきであると思う。

人々の機敏さについて面接の結果は次のようなことを明らかにしてくれている。

- 景気・不景気の波を機敏な行動によって上手に乗り切つていこうとする人達がこの地域には極めて多い。
- 失敗を苦しめないで素早く転換して立直つてしまう。
- 現在足利が曲りなりにもこのような発展をとげてきている背後には幾つか足利人の長所がなければならぬ。中でも足利人の機敏さは他にすぐれた長所であろう。動きのはげしい織物を取り扱ひながら、他の多くの産地と競争し、又大工業の圧迫を受けながら、これを乗り切つていくためには、現在のような機敏さが、もっと生かされなければならない

「足利の人々には生き馬の目を抜くような機敏さがあるとよく言われるけれどもこのような機敏さがなければはげしい競争に打ち勝つて生存競争に残ることはできないのだ」

人々の生活の問題の解決が、殆んど個人々々の努力だけにゆだねられている限り、人々はさきにもあげた利己主義と共に、この機敏な生活態度によりかかつて生きぬくより他に生きられなくなり、身につけるに至つていのである。このように人々の機敏さは現在のところ、多くの競争に打ち克つて現状を維持し少しでも前進しようとするためには是非とも欠くことのできない特性の一つである。

併し又これが、現在のように利己的な意識と結びあつて離れないという点については充分な反省が加えられなければならない。勿論現在人々のもつている機敏さの発生がこのような個人的な競争に打克つ必要から生れてきておるのであるからやむを得ない点もあるけれども、もはや単なる個人の機敏さでは解決し切れないような問題に当面してなおこれだけによりかかつて自己並びに地域の振興をはかろうとする点は大いに問題とされなければならない。

(c) 事大主義権威主義に関係した意識

(イ) 事大主義・権威主義

さきに概要の説明のところ述べたように、或る方面では徐々に否定されながら他方においてはより一層根強さをましてきているところの事大主義や権威主義は、色々な面で人々の行動を強く規制している。

地域において、権威主義が最も明瞭に否定されていると考えられる点は、現在の経済的な実力の優劣によってそれぞれ人間の価値づけが行われるため、従来からもつてい

た社会的な地位や家柄等の権威に対して それ程重きをおかなくなつてきているという点においてである。一勿論大雑把にこのような考え方をする点については異論もあろうかと思われるけれども、大勢としてはこうした傾向が強い。

而して又、経済生活において、人々はそれぞれ孤立して、ときには他人をおしのけてもというようにはげしい競争を行いながら 機敏に自己の運命を切り開かなければならないような生活を長い間つづけているうちに、人々の意識の中に悪く言えば利己主義ではあるけれども、「だれにも頼らない一人立ちの構え」が自ずから養われ、これが権威主義を否定する力として成長してきているのである。

が併し、一面において、権威主義を否定しつつあるところのこのような経済的な実力主義は他の面において、経済的な力によって強く支配されるところの、新たな権威主義的な傾向を強めるに至っている。こうした傾向は、最近の不況の深刻化と共に一層強められてきている。こうした経済的な力の弱さによって、他の地区に比較すれば比較的清算されてきた事大主義・権威主義が再び強められている傾向がある。又戦後一時行われた配給制度・供出制度の頃 役人の権威主義を広く経験させられ、又極めてかこくであつた徴税旋風に見舞われて、人々は「泣く子と地頭にやかたれない」といった権威主義的な意識を心の中に強めざるを得なかつた。而してここで、若し情実や縁故が少しも行われぬか、行われても極めて僅かであれば、人々の正しさを主張する声はもう少し正しい形で表面に現れ、権威主義を否定する力がもりあがつたであろうと思われるが縁故や情実が少なからず行われ、権威にへつらいおもわろいくじのない意識を強めてしまった。不況の深刻化に伴つて失業者が多くなり はつきりと自己を主張するような自主的な人がきらわれ、権威におもね必要以上に自己を否定してへつらうような人達が特に受け入れられるということも、権威主義を強めている。極めて多くの人達からきかされることではあるけれども「足利の人はおとなしいから、他の土地のような労働争議がこの土地には起らないのだ」というような意識の中にも、我々は何か このような権威主義の影を感じないわけにはいかないのである。勿論そうするより他に生きていくことができなから やむなくそうしているのではあるけれども このようなことは人々の述懐の中に極めて多くみられる問題的な意識態度として注目されなければならないのではないだろうか。

併し又地域の人々がすべて「長いものにまかれろ」主義であるわけではなく、「個人主義だけれども独立心が強く苦しみに堪えて頑張り抜いて資産をなす」人が少くないことや、「独立して一代で資産を残す人が多いが そのせいもあって実力主義である」等の意見の少いことの中によく権威主義を否定してきた地域の人々の考え方がうかがわれもするわけである。それにもかかわらず「私などのような貧乏人には何もわからないから もつと金をもっている人からいろいろなことは聞いて貰つた方がいい」とか、集会の際に座につくときなど、まだ上座とか下座とかの觀念が近在の農村等と殆んど変わらず 下座について決して上座に進まない等のことの中に根強い事大主義、権威主義をうかがうことができる。而して選挙などのときにも、有力者の何人かが町内一致でおすというようなときには、一致して押すというようなことだけに殊更強い意義とみとめて、個人の意志の相違というようなことを無視し勝ちである。

人々は又 権威の前には常に無条件に従わなければならないような毎日の生活を長く続けているうちに、お互の人間関係においても ただへり下るということを必要以上に大切に考えるようになり、へり下られただけで何となく満足であるというようにき

えなっている。

集会などの際にも、何人かの中心的な人達の意見は絶対的な力をもち形の上では 全体に凶るといふような会が開かれても それは僅かな人達の意見を了承し確認する以外にそれ程意味のないことが極めて多い。

こんなときに 若し誰かがこのような半ば既定の意見に対して、違った立場からの意見でも述べようものなら、殆んどの人から極めていやな感じを受けさせられなければならない。即ち人々は、異った意見に対して、「奴は理窟つばいからな一、何も今更誰が考えたってそんな好きに事を荒立てなくてもよさそうなのだ。自分のおそいことを知らせるために無理に問題をむずかしくしようとしている。ああいうものをおぞ馬鹿という」

「能あるたかは爪をかくす」ということもあるように、本当に知慧のある人は黙っているんだ」…等々、てきびしい攻撃を受けなければならない。

特に小さな単位の選挙のときなど 一人異った立場をとるといふことのためには 極めて大きな非難を受けることを 覚悟してかからなければならないような風潮さえまだ残っている……勿論農村程ではないが。

併し、新しい形において、このような権威主義を否定しようとする動きが芽生えてきつつあることは 概要のところ述べて通りである。

(ロ) あいまいな意識と感情的な行動

事大主義や権威主義が強められ、人々の間に自主的・理性的な考え方が通用しなくなると共に、人々は公の生活に於いては極めて適当に事を運んで問題を回避し自分だけの生活において 自己の自主性を満さうとし、又理性よりも感情を先に立てて物を処理しようとする考え方が強くなってきている。無批判的になり、更には自主的・理性的な態度を殊更に嫌うようにさえなっている。

「話し合い等のとき、反対意見が出ると互に感情的になってしまつてうまく話し合いが進展していかないことが多い」とか「異った立場の人の意見に対して 理性的な態度を冷静に耳を傾けるということが特になされない」といふことが極めて多いといわれるけれどもこのようなことは人々の権威主義が根本にあつて生じてきているのであろう。従つて又人々の考えは理論的にきわめてあいまいであり、その場限りに陥り易い。

(5) 総合的考察

今度の考察からも、人々の意識が常により強く経済的な影響によって左右されていると考えられる故、先ず人々の「経済先走りの意識」を中心にして、人々の意識を総合的に考えてみよう。

経済的力の弱さについて人々は次のように話している。「誰だつて いい設備を入れて能率をあげたいと思いますよ、併し今のところどうやってみても資金を設備にまで廻せないのが実情です。少し位金が入つても、その金は皆運転資金に廻さなければならないから、設備とまではいかないのです。それが戦争前でしたら、この土地でも 5万、10万の資本金をもつていた機屋や買継は少なくなかつた。それが、今その割合にして ざつと 400倍にみて、2000万、4000万の資本をもつている機屋や買継はどれだけの？と言われると殆んど見当らない状態です。2000万円はおろか、その10分の1の 200万円で

も自由に廻せるというような人はそれ程多くはないでしょう。戦後は戦前に比べてそれだけ皆苦しくなっているわけだし、それだけに又、人々が将来を考えて、設備に廻すというような余裕もなくなり、特にあくせくとしだしてきたのだし、金々と目の色を変えんばかりになってきているわけなのです。

「機屋や買継の話とはいえば、大体きまっています。糸の相場の話、織物の相場の話これ等はまだいいのですが、機屋同志の経営の状況のうわさ話、奴は今度はうまくやったとか、奴のところははずれてばかりいて随分苦しうだとか、1000円のを800円で投げているとかいうように、その殆んどが金に関係したことばかりです。まあ他人の織物の糸の使い方やその他製品の話しもありますが、それが中心になるというようなことは殆んどなく、金に関係して話される位です。」

「人々はよく足利の機屋には協同性がないからだめだとか、合理化しなければだめだとかいうことをいいますが、合理化するにも、何より金がなければできません、その金をどこから持ってくるかということが問題ですね。他人の金をとってくるわけにはいきませんし、借りようとしても銀行からは貸してはくれないし、どうにもなりません。弱い資本でも協同してやればいいとはいっても、皆がその気にならなければどうにもなりませんよ。自分が困るときは他人も同じように困っているのです。助けてはくれませんが、そこで協同だの合理化だの言う前に、先ず要するに働らくということが何より大切になるわけです。そして、いざというときの準備をしなければまたたくまにつぶれてしまうのです」

「若い者や、機屋の内情をよく知らない人達や又身をもって悩みを体験しない人達は合理化だの、能率化だの、協同化などの理想的なことばかり言っております。併し一度自分で工場なり店なりを経営してみれば、どんなものかよくわかるようになりますよ。2回か3回不景気にあってみればそんな理想的なことは言っておられないのだということがよくわかるようになります。」

人々はこうして、大企業のしわよせを手一杯に受けながら、僅かな好景気を何よりの希望にして、苦しい経営をつづけているのである。機屋がこういう状態であるので、その下請としての整理屋や染色屋や機械屋のやりくりがどの位苦しいか想像がつく。そして更に苦しいのはこうした工場や会社で働らいている事務員や工具や職人の暮しの苦しさは現在のところ全く想像以上である。今回の調査からも明らかのように扶養家族を4・5人もっている職人の給料が大体8000円前後である。しかもこの給与は10年つとめても20年勤めても殆んど昇給ということがない工場が多いのである。更に悪いことは、こうしたところでは不景気になってくると、いつも給料日が遅れ、ときには一月遅れ、二月遅れというようになって何時貰えるのだから見当がつかないというようなことが少なくない。そして一月遅れて満足に貰えるかと思っただけで「今月はどうしてもやりくりがつかないから半月分で或は10日分で我慢して貰いたい」というようなことがときどき起るのである。ここまでにしても多くの事業主の経営はまだ安定を取り戻せないでいるのである。多くの事業主が銀行のような正常なルートからの資金を現在以上にのぞむことができず、無理な金融によって経営が一層苦しめられ、更に税金がその上に覆いかぶさってくるというような悪条件を辛うじて切り抜けているのである。いつ工場や商社を閉鎖して整理しなければならなくなるかわからないのが現状である。勿論足利の工場全体がそうだというのではないけれどもこうした工場が極めて多いのである。何か一つ一寸としたつまずきがあると全く身動がとれなくなり、賃機に転落

するか思い切った整理を断行しなければならなくなってしまうのである。この整理もこの地域の特異性がよくあらわれている。即ち、整理に当たっても殆んどこれといった失業手当などは支給されないのが実状であり、解雇される入達が極めて自然な気持でしかたがないのだというようにこれを納得するということである。旦那の家も苦しいのだからということで諦め又忙がしくなったら使つて貰うという形で暇をとつたということと解雇されるのが多い。

賃機に転落してしまえば糸の価格の変動から直接的な損失を受けないかわりにその織賃は極めて安く、又仕事が必ずしも常にあるとは限らない。勿論忙がしいときには織賃も高く一びき織れば80円~120円になり一日一台〇?程度になれるからこの限りでは次第に余裕も生じてくる筈である。併しこうした仕事は永くは続かずいくらでもよいから織らなければならないというような期間が長いのである。従つて給料を払い、電気料を払い、機械の消耗を考えると、純益は極めて少なく、やつと自分達の生活を支えていける程度以上にはでないのである。このような苦しい仕事であっても税金は一台いくらか容赦なくかけられてくる。そこでそんなことが行われているのだろうか?と思われるような働らき方さえ行われるようになるのである。このようなことは極端な例であるかも知れない。併しこれに近い状態の工場は極めて多い。

先ず主としての主人夫婦は傭人の女工のおる昼間は一応の仕事すまして、機械の騒音の中でねておつて、夕方起き出す。そして傭人の帰るまでに夕飯をすませ、翌朝女工のでてくるまで夫婦二人で織りつづける。女工さん達がくれば、そこで飯をたべ製品を納めたり次の仕事を取るために外に出る。一部ではこのような毎日をくり返しながら生産をつづけているのである。

こうした経営が一部で行われれば、何とかなつて平常から自分の工場の合理化をはかり労働基準法をできる限り忠実に守りながら能率をあげ、経営を成立たせようと努力している人達も、そうした経営を更に押しすすめていくことができなくなってしまう。現在程の資本と規模とでは、いくら合理的にしてみても限りがあつて、到底さきのような無茶な労働の前にはたちうちできなくなり、自分も又同じように無茶とも思われるようなはげしい労働だけによつて切り抜けるより他に方法がなくなつてくるのである。「基準法だ基準法だとやかましく言うのだったら、どんな工場でもそれを守らなければならないようにしなければ、いくらやかましく言つても基準法は守れないという意見を稍堅実な経営を行っている人達からよく聞けけれども、この辺の事情を物語っているのである。こうした無茶な生産はやがて生産過剰をまねき採算を度外視した投売りが行われる。人々は自分の受ける損失を、できるだけ少くしようとして、同業者の申し合わせなども無視して、一刻も早く売り逃げようとする。而して又このようなときに、もう少し資本があればこんなひどく投売りをしなくてもすむのにと考えれば、人々は自己の資金の無さを常に強く意識しつづけ、もうかるときには、たとえどんなことをしてももうけなければだめだといつて、しやにむにもうけようとする。同業者との協力も、良心的な製品の生産もすばらしいもうけが直ぐにやつてくるのではないので、いいことはわかつておつても一部の人を除いてそれは取り入れられない。人々のあせりはそれでなくてさえ糸を取扱っている関係から投機的であるその気持を一層投機的なものにしてしまつている。このように、人々として計画的な経営よりは投機的な経営に、又協同の力によ

ってこの大勢を乗り切ろうとしないで、個人の抜けがけ的な機敏さや他人や地域全体の名声ということなど一切考えないような利己的な行動によってこれを乗り切ろうという考え方にかり立てているものに次のような事情がある。

足利の機業が極めて広い範囲に及んでおり、他の産地のように内地向、外地向と片寄らないでこれらが平均しているのである。従っていつの不況のときにも、この地域のすべてが一軒残らず全くの不況に追い込まれるというようなことが極めて少ない。このようなことは極めてよるこばしいことでもあるが、併し又機業家全体の大同団結を図ろうというような観点からは、これが大きな障害の一つになっているのである。即ち、若し地域の工場全体が一様に同心ような困窮に直面させられるのであれば、地域の協同化へのきざしは現在よりももっと顕著であったろうと思われる。それが、この地域では何時の不況のときでも、その中で僅かながらも幾つかの或る種の工場が不況の波をそれ程に受けなくて必ずうらやまれるような生産をつづけているということがくり返されてきた。人々は協同するよりもこれを待ちのぞむ方にいつも多くの期待をよせているのである。そしてできれば自分もそれにあやかろうとして、こっそりとその糸使いと柄とを真似てそれよりも安く機敏に売り出そうとする。こっそりと何人もときには何十人もがそれにとびつきはじめのうちは一緒にもうけることができる。こうしたことが協同化の大きな一つの障害になっている。

併し、どうやってみても現在のところ大勢は下り坂であり、こうした大勢の中で盛り返すということは容易な業ではない。個人の力ではどうにもならないところがあり人々はそれをうすうすと感じとるに至っている。そしてこうした個人の無力を協力によって補わなければ矢張り何といってもだめなのだと感じとって本当の協力へのあゆみをふみ出そうというきざしも僅かながらみえはじめてきている。併しこの諦めは、大勢として矢張り、その日がすぎればというような日和見な考え方やしかたがないという暗い自棄的な諦めの気持としてあらわれてきている。

工具も又、工場主からして生活が成り立たないのだから、給料がおくれても分割払いになってもしかたがない。工場の閉鎖や解雇があっても、又一銭の解雇手当が出なくても、諦めざるを得ないと考えるようになってきている。又ここで言ったところで、どうせ出ないのだし出されなくて、あとで「奴はうるさいとか何とか」言われるより、言わないでだまっていた方がましだと考えて諦めている。若し諦めないで低賃金を口にし、待遇の改善を口にするようなことがあると、このような状況の下にある事業主にしてみれば、それが極めて無理なことであり、常軌を逸しているとも感ぜられるのも理由のないことではない。工場主にしてみても、工具の待遇をよくし、安定した生活が営まれる工具の仕事の能率のよいことは言われなくともわかっているものであり、できることならよくしたいと常に考えているのである。このように考えておっても、どうしてもできない。それであるのに、無理にもせよというのだから言う方が無理だと考えられ、無理を通そうというのだったら、その人はまさに破壊的な考えをもった人であり、そうしたレッテルを貼られることが当然だという考え方が生れてきている。使われている人達のことを考えない一部の頑迷固陋だといわれる人達の考え方もこうしたところに支えがあるのである。労働法の違反だつてつぶれてしまうよりはましだし、規約や協約に違反するのも生き抜くためだからしかたがない。協約や組合の規約にしても馬鹿正直に守っていたら、誰だつてそんなに固く守るものはないのだから馬鹿をみるだけだ。適当にしなければだめなのだと考えられてきているのも、以上のような体験を通してのこと

である。営業道德の低下もこの適当にというところから生れてきているのである。

あとがき

中小企業者の問題的な意識はこのようにして経済的な困窮とそれを切り抜けるための生活の構えとして互に因となり果となって生れるべくして生れてきているのである。

以上の考察はまだ常識的であり、粗雑なものではあるけれども、我々の能力の不足と期間の関係とから止むを得なかつた。今後更に不十分なことについては引続いて考察を深めていきたいと考えている。

(3) ガイダンス・ニーズの調査

① 調査の目的

毎日個々の児童生徒に接し、それぞれの子供達の指導を通じて、子供や更にはその背後にある地域の問題と対決しつつある教師は、自己の胸の中に、児童生徒並びにその背後にある地域の人々の考え方や行動の仕方に対して、「一番困ることはこういうことだ」とか「これがなくなればいいんだが」とか「こんなふうになってくれるといいんだが」とかいうような考えや悩みがあるのではないかと思われる。このような悩みや必要を明らかにし、具体的な教育目標設定の際の、一つの資料にしようとした。

② 調査対象・期日並びにその方法

1. 対 象。 市内小中学校教師 376名
2. 期 日。 昭和28年10月10日
3. 方 法。 次のような質問紙を出して自由に記入して貰い集計した。

おねがい

足利市教育委員会は本年度初頭、昭和28年度の教育努力目標を設定し、先生方の御手許におとどけ致しましたが、引きつづいて教育の一般目標を設定するにとなりました。この一般目標の設定に關しては、目標設定委員会をもち、現在当面している日本の課題やその他の社会調査の結果、さらにはさきに示された文部省や、栃木県の教育の一般目標を参考にし、この地域ではどのような方向に教育の力がそそがなければならないかの教育の一般目標を明らかにしたいと思ひます。

子供達並びに子供達をとりまく社会に接しながら児童生徒の学習指導や生活指導に當っておられる先生方の胸の中には、必ず、「こういうことがなくなればいいんだが」とか「こういう力をもっとつける必要がある」とか「こういうところはなおさなければならないのであるが」等、日頃氣のついておられること、御感じになつておられることが、いくつもおありのことと思ひます。このような皆様の御意見は地域の教育目標設定のために種々と貴重な資料となりますので、御感じになつておられる御意見をありのままにおかきいただければ幸いに存じます。御多忙中誠に恐れ入りますが、この調査の主旨を御理解いただき、是非御協力下さいませよう御願ひ致します。

(記入に當つて)

- 御意見は教科を取扱う際に感じられておることでも、或は全体的な生徒指導に關することの何れでも結構です。できるだけ沢山お寄せ下さい。
- 担当教科に關しては該當する方を○でかこんで下さい。教科名のところは担当なさっている主な教科をおかき下さい。小学校の先生については、専科の先生以外の先生は全教科と御書き下さい。